生涯学習課 NEWSLETTER

福島県文化スポーツ局　生涯学習課
TEL　024 － 521 － 7784　　fax 024 － 521 － 5677
E-mail　shougaigakushuu@pref.fukushima.lg.jp
NO.6　　H31.2.26

ニューズレターの概要

このニューズレターは、平成２７年度に開催された「全国生涯学習ネットワークフォーラム」の後継事業として、震災からの復旧・復興や地域課題に取り組んでいる県内の関係者等の情報を共有し「学びをひろげ、つなげる、いかす」ため、年に２回発行するものです。

また、皆様方からも、日常的な取り組みや様々な企画のもと実施されたイベント等、生涯学習に関する情報ならどんなものでも結構です。多種多様な情報をぜひ当課までお寄せください。

今後も、互いに情報を共有し合い、継続的な取り組みが推進されるよう積極的につながっていきましょう。

花ひらく小さな城下町に ～三春町民図書館～

滝桜で有名な三春町。城下町の風情のある街並みの中に三春町民図書館がある。幅広い世代を対象とした事業を展開し、町民から親しまれている。

今回、三春町教育委員会生涯学習課長兼三春町民図書館長の本間徹氏、三春町民図書館主任主査の内藤タケ氏に施設の運営方針や魅力等について話を伺った。

町民の読書習慣の確立を目指して

三春町民図書館は、「地域に根ざした図書館」をテーマに、町民のニーズに応じた図書の選書や地域資料の調査等のサービスを行っている。

また、館長の本間さんは、「本は、生き物。常に新鮮な本、話題の本を回せる図書館でありたい」と話すように、町民側に立った運営形態を目指している。通常業務の他に、町民の読書習慣の確立を図るためのイベントや教室も開催している。

ドキドキがとまらない！「特別おはなし会」

季節ごとに年四回開催している「特別おはなし会」は、大人も子どもも楽しめる企画となっている。

昨年一月、「お正月プレミアム企画・おはなし&かるた大会」を開催。ボランティアとして参加した田村高校ＪＲＣ部員が「冬」をテーマにした絵本や人形劇等のおはなしを繰り広げた。かるた大会で使用したかるたは、過去に田村高校美術部が制作した、三春の名所や歴史をテーマにしたもので、ふるさとの魅力が伝わってくる。他にも、自分の代わりをぬいぐるみに託し、図書館にお泊まりさせる「ぬいぐるみのとしょかんおとまり会」。夏の夜、親子で館内を探検した後、こわい絵本の読み聞かせやお話を聞く「夜の図書館探検ツアー&ちょっとこわ～いおはなし会」など、季節感を出した企画を考案し、毎回、多くの親子連れを楽しませている。

親と子の絵本ワールド

三春町では、「子育てに悩む母親に心の安らぎと子育ての楽しさを感じてほしい」という目的から「ブックスタート事業」を行っている。この事業は、三春町保健センターで実施される四か月児検診の際、図書館司書が母親に読み聞かせの手ほどきをし、絵本をプレゼントする事業。昨年から、絵本配布を開始したところ、図書館への関心が高まったという。「母親が本を介して子どもと向き合える時間づくりに興味・関心を持ったことで、最近では図書館に赤ちゃん連れの利用者の姿が見られるようになった」と、内藤さんは事業効果を嬉しそうに話していた。

大人のための学習講座

昨年度、町民の要望を受け、三春町民図書館と生涯学習ボランティアの会の共催により、全五回の連続講座「朗読講習会」を三春町交流館で開催した。参加者は、短歌や俳句、古典、小説を声に出して読んだり、詩を歌のように声を合わせて読む「群読」を体験したりするなど、朗読の奥深さを学んだ。参加者からは、「声に出して読むのは健康面でも良いこと。昔の言葉の響きも味わい深い」などの声が数多く聞かれた。

～知の拠点として～

最後に、館長の本間さんは、「現状に満足せず、生涯学習の活性化に繋がるよう、新しい発想を職員で出し合い、新規事業にもチャレンジしていきたい」と、「知の拠点」として、生涯学習への積極的な参加を促すための事業に意欲を見せていた。

生涯学習課　NEWSLETTER

～人と自然が輝く ふれあいの村で～「葛力創造舎」

緑豊かな景観と「結」の文化が残る葛尾村で村の魅力を発信し、地域起こしのための活動をしているのが一般社団法人「葛力創造舎」である。

今回、葛力創造舎代表理事の下枝浩徳氏と「葛力創造塾」二期生の河井優貴氏に団体設立のきっかけや、ふるさと葛尾への想い、未来への展望等についてお話を伺った。

ふるさとのため 想いを力に

葛尾村出身の下枝さんは、震災後の福島にUターンして、平成24年2月11日に葛力創造舎を設立した。「設立当初、葛尾村は全村避難中であったため、当時は人も資金も集まらず先行きが暗かった」と下枝さんは当時を振り返る。現在、「村の暮らしを100年後にも残す・つなげること」をテーマに掲げ、村の文化や想いを掘り起こし、生業にしていくことで、少人数でも幸せに暮らしていける経済の仕組みづくりに取り組んでいる。「葛力創造舎」の名前の由来には、「葛尾の力になりたい」という想いと、「かつりょく」という響きが力を持っていること、そして、未来をイメージし、互いに学び合い、成長していける場所にしたいという願いが込められている。

伝えたい！ 葛尾の魅力！

葛力創造舎では、村の文化を未来に繋いでいくため、「米作り」を中心とした、さまざまな事業を展開している。米を加工した商品開発、関東方面での葛尾産品のPR活動、村の暮らしを体験するワークショップ、葛尾村へのツアー団体のコーディネート、村の暮らしを紹介する冊子の製作、HP上での葛尾村のPRなど、多くの事業をとおして、県内外や海外に葛尾村の魅力を発信し、交流人口を増やそうと努めている。

稲刈り後の様子

村づくりは 人づくりから

葛力創造舎では、将来にわたり、生業を担う人材を数多く排出していくことで経済の循環ができるという考えから、「葛力創造塾」という若者を対象とした研修会を開催し、人材育成に力を入れている。研修では、コミュニケーション・スキルやリーダーの資質として必要なマネージメント・スキルを学ぶことができ、平成29年に開校以来、塾生は累計で50名を超え、社会で活躍している。

～人と人との つながりを～

葛尾村は、平成28年6月に一部避難指示が解除され、現在までに帰村した村民は震災前の約2割程度である。厳しい人的環境の中、事業を軌道に乗せることができた理由を代表の下枝さんに伺った。「人との関係づくりで最も重視していることは、労働をとおして、共に苦労したという価値観や喜び、達成感等を共有すること」と下枝さんは話す。米作りをとおして、スタッフも村民も一体となり「温かい家族のような空気感」が事業を成功へと導いた。

また、下枝さんは、「人とのつながりをつくる際、村民の思いを引き出し、やりたい活動を支援するという関わりが大切」とも話す。一方向的な関係ではなく、村民のアイディアに乗り、それを形づくるために支援するというスタンスを貫き、村民との信頼関係を築き上げた。

若者と村民との交流

葛尾村復興交流館完成！

葛尾村復興交流館「アゼリア」

昨年6月、「葛尾村の復興のシンボル」という大きなテーマを掲げ、交流と情報発信を目的とする葛尾村復興交流館「アゼリア」が誕生した。葛力創造舎では、これまで館内のフリースペースを利用して、「ワークショップ」や「1日限定カフェ」を開催した。下枝さんは、「今後、施設との連携も視野に入れて事業を展開していきたい」と話されていた。

今後の展望について

今後に向けて、『「かづろうさんげ（かつらおさんの家という意味）」というコンセプトを展開し、村全体を1つの家族に見立てながら、イベントに参加した村外の人とも親戚のような絆でつながるネットワークを構築していきたい』と語る下枝さん。そのためのゲストハウス整備、ワークショップのコンテンツ整備等に力を注いでいく予定だ。

最後に、「葛力創造舎にとっての資源は、人材そのもの。楽しくやってくれる仲間がいるから続いている団体。未来のビジョンをしっかりもって、単年で終わらない活動を地道に積み重ねていきたい」と語る下枝さんの取組が、葛尾村の再生へと繋がっていくことを期待したい。